

二度目の来日公演。父譲りの重砲で、雨の昭
和記念公園のステージに立った

- 写真＝山本和生（出版写真部）
- 文＝佐久間マイ（本誌）
- 取材協力＝中山貴理

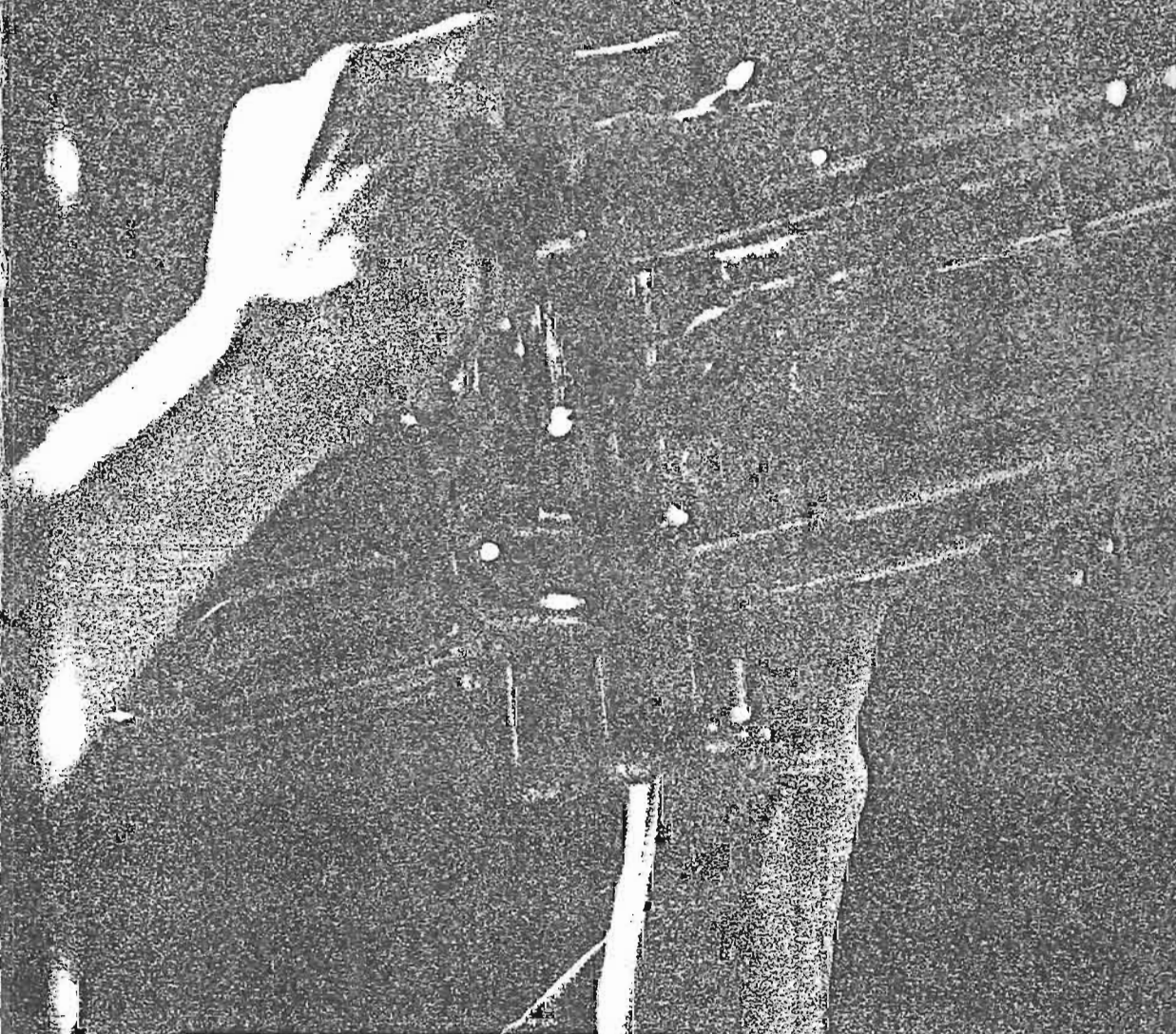
1993 - 21
- 1/15

崔健

ツインエン

大陸の若者を熱狂させる
スーパースター

人口十二億のこの国で、
若者に名を聞けはまず知らない人はいない。
彼のメッセージはどこに、
人々は惹かれるのか



白髪を白立たなくするリンス すぐに洗い流せて 着色効果アップ

1993-21
2/15



資生堂
カラーリンス
NATURAL
グレー、ブラウン、ダークブラウンの3色

300g/3色・各800円 ポンプタイプ(700g・1,500円)

一無所有 (持ち物は公にもなし)

ずっとずっとと言っていたんだ、

お前はいつ俺と来てくれるのかと

でもお前は俺のことを笑うだけ、「無所有だと

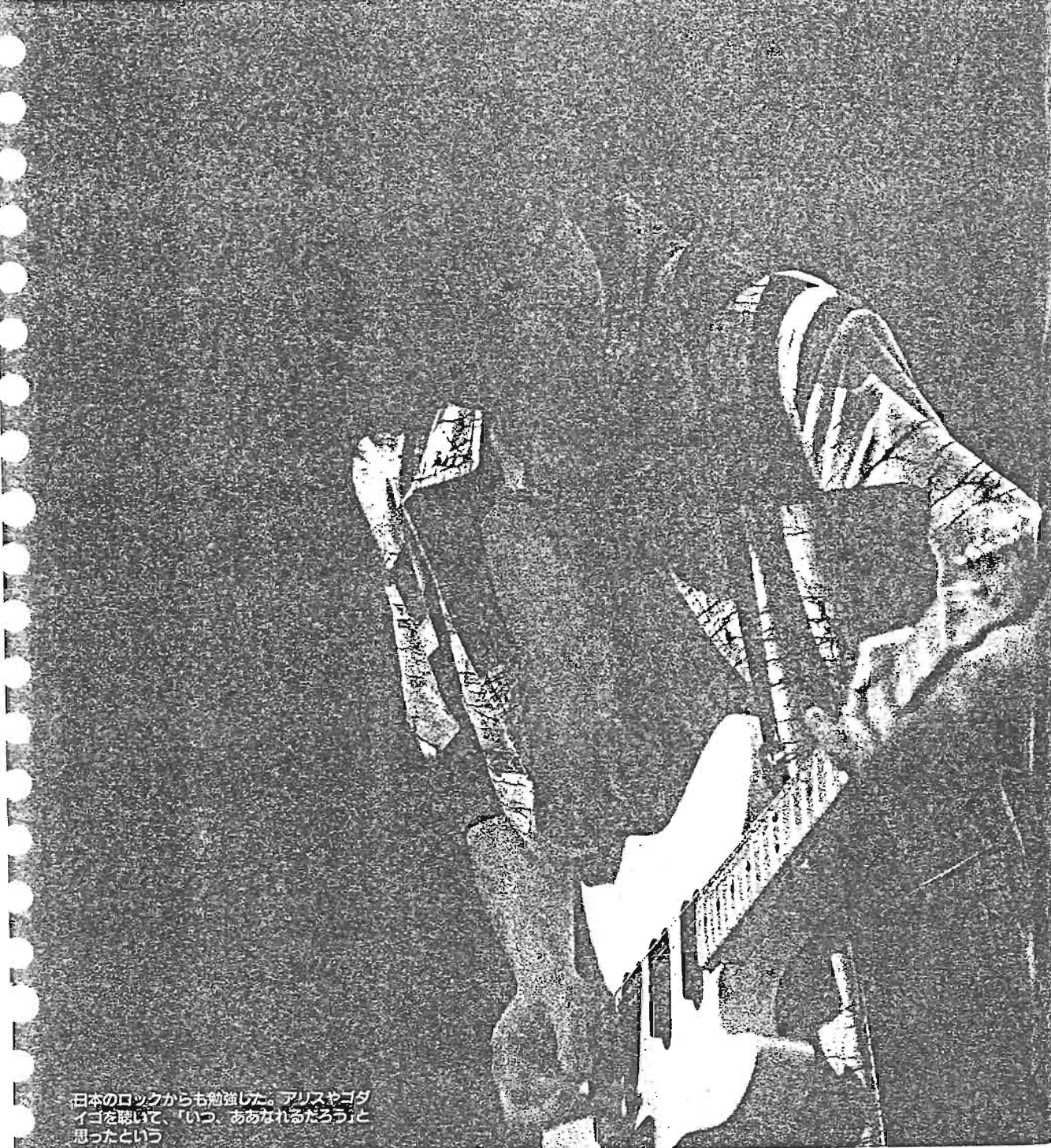
俺はお前にあげるよ、俺の理想も、俺の自由も

でもお前は俺のことを笑うだけ、一無所有だと

ああ……、お前はいつ俺と来てくれるのか

ああ……、お前はいつ俺と来てくれるのか

橋爪大三郎・張静華 訳詞



日本のロックからも勉強した。アリスやゴダイゴを聴いて、「いつ、あんなれるだろう」と思ったという

北京はいまロックブームだ。ここ数年、雨後の筍のようにでてきたバンドが、今年になって花開いた感じだという。もっとも、初の中国産ロックが誕生してから、まだわずか十年程度しかたっていない。一九七九年以来の開放政策に伴い、欧米のポップスやロックが入るようになり、多くの若者がダビングにダビングを重ねてヨレヨレになったテープを夢中になって聴き込んだ。大スターとなった崔健も、そんな若者の一人だった。

八四年にバンドを組み、二年後には代表作「一無所有」を発表。ロックに中国固有の音を取り込み、緻密な文章表現で何重もの意味を含ませた歌詞が、彼の音楽の特徴だ。デビュー以来、人気はうなぎ登りで、国内はもとより、九一年にはビデオクリップがアメリカのMTV大賞部門賞を受賞するなど、海外でも注目されはじめた。

しかし、外国のジャーナリズムの取り上げかたは、彼の人気が急上昇した時期に天安門事件が重なったこともあって、「反体制の旗手」といったかたちのもが多かった。北京でのコンサートが禁止されている「ある会場では、演奏中に電源が切られた」といったエピソードも、そのイメージを強化していった。舞台上で赤い目隠しをして、

あの日お前は、ひと切れの赤い布を取り出し俺の目隠しをして、空を見えなくした。そして尋ねた、何が見えるかと俺は答えた、幸せが見えること。(ひと切れの赤い布)橋爪大三郎・張静華訳詞
と歌う彼のパフォーマンスに、政治的な匂いを嗅ぎとることはできる。だが彼自身は、歌詞同様、崔健像というものに何重もの含みを持たせて答える。

「その見方は間違いではありませんが、政治的な部分は僕の音楽の一面ではない。シュプレヒコールばかりやっていたら僕だって嫌われていたでしょう。音楽はあくまでも音楽でしかない。音楽がリーダーになることはないんです。」

音楽と彼の付き合いは長い。六一年八月、トランペット奏者の父にハリーナの母という、音楽家の家庭に生まれた彼は、父の手ほどきを受け、十七歳でトランペッターとして北京オーケストラに入った。しかし

1993-21
3/15

「宝島30」七月号の特集は「極論・憲法なんて、いらない」。憲法はどうあるべきかを論ずる前に、憲法が存在すべきかどうかを考へるのがもの順序というものだから、「の特集の狙いはなかなか正しいと私は思う。だがこのラジカルな議論には、ちょっとムスカシところがある。

創刊号から西部邁論を連載している小浜逸郎は、我々の生活感覚との距離を緻密に測定しながら西部の憲法論を批判し、自らの改憲論の根拠と輪郭を描いている。橋爪大三郎は、権力を統御するためにこそ憲法は必要だ、憲法を自ら作り出すことが近代人の条件だ、憲法が国家解体の理念を含んでたっていないじゃないか、といったもながら明晰に説いている。二人の議論は、筆者には若干高級すぎるが、教えられるところ多く、なにより「には」のテーマについて発言する充分な理由があるのだ。

「は」どんな憲法も本質的に押しつけであり、憲法はどこのどこの、と考える「こそが正しい大衆なのだ」と述べる宮田論や、自らは近代合理主義者であるが、日本人一般はそもそも法治国家など望んでおらず、憲法

斜断機

「憲法」論議のムスカシ

などあっても守るつもりはないのだから、憲法論争自体ナンセンスだ、という池田清彦のラジカルな議論はどうか。じつは筆者自身、冷戦終結後はみんな主体的に国の将来を考えよう、というポスト左翼的倫理性は嫌いだし、憲法についての感じ方は二人に近い。しかし単純な疑問なのだが、「には」発言の「理由」がないのではないだろうか。憲法を論ずること自体がナンセンスなら、なぜこんな発言などせず、魚釣りにでも行かないのか。

もちろんこれらの議論こそがこの特集を鋭角的にしているのだし、発言するな、などと言いたいのではない。憲法など関係ないはずの私が、なぜぐちゃぐちゃ言わずにいられないのか、何が不快で不都合なのか、それをもっと踏み込んで述べてくれ、と言いたいのだ。それこそが、憲法の正体を我々の側から明かすことになるはずだから。

魚釣りにいったら、魚は憲法とおりに釣れ、などというぐちゃぐちゃ奴が来た。だから、はかやろう、俺には憲法なんか関係ねえ、と言いつつ返してやった、というのなら、問題ははっきりするだけぐちゃねえ。

(柵)

読 書



スシバーを食い、ドラムが2人、中国の勢も加わった大所帯だ

忙しいスケジュールの合間に、ジャズライブを聞きに新宿へ

モスクワのメーデーでデモ隊と警官が衝突した記事に注目する

彼は、敷かれたレールにのっかって進んでいくことに、次第に矛盾を感じるようになっていった。

「自分の個性とスタイルを持ち、自己実現するためのプロセスとして、自分を開いていかねばならない。しかし、僕にも自分が開かれていなかった時期があったんです。そのころは、やることすべて、人に与えられたものをしていくにすぎなかった」

ロックは、彼が自分で選んで始めた音楽だ。そして、コンサートをするごとに、自分が開かれていくと感ずるようになった。彼が自分の曲を通して一番訴えたいことは、その経験に根ざしている。

「自我を開くということは、もっとも気分のいいことなんです。その方法を紹介したい。人々には多くのチャンスが与えられていて、そのなかから自分の生き方を選ぶことができる、それが自分を開くことになるんだ、と考えるきっかけになれば」

メッセーはあくまでも「自分を開け」一点、と強調する崔健。

北京を中心としたいまのロックブームは、その彼の思いが、状況に閉塞感を抱いている若者に少しづつ届いている証なのかもしれない。その北京で、崔健は七月にコンサートを開いた。百八十元(約三千四百円)という破格の入場料にもかかわらず、一万五千人収容の北京首都体育館は二日間とも満席だった。しかし、中国の人口は十二億。まだまだ、メッセーを伝えたい相手はいる。

1993-21-4/15



DAIZABURO HASHIZUME

橋爪大三郎 (東工大助教授)

住友ONEが五周年。ということは、まだ“ワールド・ミュージック”がブームでもなんでもないうちから、せっせと番組を続けてきたことになる。これがまず、偉い。

➤ の五年間でいちばん嬉しかったのは、番組のなかでも紹介した崔健 (ツイジェン) のアルバムが、つい最近日本でも発売になったことだ (「一無所有」東芝EMI)。88年の夏に北京の工人体育館で“霧風”のコンサートを聴いたあと、帰りのマイクロバスのなかで案内役の北京大学の学生さんたちが、ラップ仕立ての崔健の1曲 (「不是我 不明白」) を披露してくれた。それ以来、すっかりファンになった。NHKやBBCの特別番組でも紹介され、中国随一のロック・アーティストとして海外に広く知られている彼の作品を、日本の聴衆も容易に耳にできるようになったのは素晴らしいことだと思う。

崔健は92年7月、93年5月と二回来日してコンサートを開いた。5月のときには楽屋まで会いに行って、本人とじかに話もできた。じつは崔健のすべてを日本に紹介する本を作りたいかったのだが、いろいろあって、まだ実現できないでいるのが残念だ。

もうひとつ嬉しいのは、ポピュラー音楽を研究する仲間が増えたこと。住友ONEがスタートしたころ、私はちょうど旗揚げしたばかりの「日本ポピュラー音楽学会」の事務局をあずかるようになり、以来五年、いつのまにか会員も200人を越えた。その昔、ONEに引っ越しに出演した蘇越 (スーユエ) さんも学会の仲間だが、いまは帰国して国务院文化部直属の北京影音公司を切りまわしている。そのほか、海外から参加してくれている会員も多い。会長の三井徹さん (金沢大学) はこの夏、アメリカ・カリフォルニアで開かれた総会で、国際ポピュラー音楽学会の会長に選ばれた。1997年に金沢で次の次の世界大会を開くことも決まった。アメリカにつき市場規模二位のポピュラー音楽大国・日本に、世界の期待は大きいのだ。

家づくりの捨てた石が、隅のかしら石となった。と、聖書にある。卑俗だ、猥雑だ、聞き苦しいなど蔑まれ、まともな文化のうちに

数えられないできたポピュラー音楽が、気がつけば時代をリードしている。テレビ神奈川がその先鋒をつとめたとすれば、さだめし私らは、音楽ファンの後からしんがりについて歩いているのだと言えよう。それもよからう。ポピュラー音楽の研究は、音を聴いて楽しく、文を読んでもまた楽しいという、ひと粒で二度おいしいお菓子みたいなものである。

番組「ONE」出演

1993-21
5/15

レターズ

レターズ

“Sociological Abstracts”に、
本誌の英文要約が収録されます

橋爪大三郎（東京工業大学）

渉外理事から、会員の皆さんに、本誌の英文要約が今後、“Sociological Abstracts”誌に収録されることになったことを、ご報告します。

昨年春の理事会の決定に基づき、渉外担当理事である私は、本誌の英文要約が、社会学の代表的な要録雑誌である“Sociological Abstracts”に収録されるよう、交渉を進めてきました。昨年10月には先方から契約書が届き、その内容を理事会で検討したところ問題なかったので、サインをして先方に送り返しました。また、1992年中に出た『理論と方法』の11号、12号も別途編集部宛に送りました。今後、本誌に掲載される英文要約は、そのまま“Sociological Abstracts”に原稿として送付されます（見本誌一冊を送ります）ので、そのことを十二分に念頭におき、理解可能で正確で、しかも論文の的確な要約になっているような英語の文章を書いてくださるようお願いいたします。

注意点が、いくつかあります。

(1) 英文要約は、“Sociological Abstracts”に載るほか、関連する“Social Planning / Policy & Development Abstracts”、“Linguistics and Language Behavior Abstracts”に載る場合もあります。

(2) 以上は、印刷されるほか、データ・ベースとしても利用可能になります。

(3) 送った英文要約の原稿に、先方が手を加えたり、書き直したりする場合があります。（下手な英語を直し、長すぎるものは削ります。）またデータ・ベースに収める場合、索引や分類コード、著者の連絡先などの情報を加えます。

(4) 英文要約の著作権は、“Sociological Abstracts”誌が保有します。

このうち、(4)が気になる会員もおられるかと思いますが、基本的に論文執筆者の利益になることですし、学界の慣行でもあるので、問題ないと判断してサインしました。

今回のことをきっかけに、『理論と方法』が国際的に注目され、情報発信源としての日本の社会学界の評価が高まることを期待したいと思います。会員の皆さんのご理解とご協力をお願いします。

理論と方法

日中両国共同世論調査の呼びかけ

橋爪大三郎（東京工業大学）

1992年9月、天津社会科学院を訪問して、社会学研究所、日本研究所の皆さんと交流の座談会をもちました。中国の社会科学は、1979年以來の「改革開放」の進展によってようやく発展の軌道に乗りつつあるところで、ちょうど戦後社会学の勃興期のような熱気を感じました。社会学研究所としては、アメリカの先行研究などを参考にしながら、実証的な調査・研究を精力的に手がけ始めている、とのことでした。

その席上、日本研究所の周啓乾所長ほか数名の研究者から、民間世論調査などで日中の比較研究ができればよいのだが、という熱心な希望が伝えられました。たしかに、日本の対中意識、中国の対日意識の比較や、同一の質問項目に対する両国民の反応の違いなど、専門の研究者によって調査すべき点が多々あると思います。ただこれまで、日中両国の社会学者の交流実績があまりなかったうえに、為替レートの関係もあって、中国側単独では両国にまたがる調査をやりにくいのが現状です。今回の提案は、日本側から言えば、相対的にわずかの予算で中国での調査も可能となるわけで、こういう方面の研究者にはおいしい話ではないかと思えます。私自身は、そうした実証研究を手がけていませんので、帰国してから『理論と方法』などを通じて呼びかけてみると約束して、帰ってきました。

そこで、会員や読者のなかに、こうした企画に興味をお持ちの方がおられたら、ぜひご一報いただきたいと思えます。連絡の橋渡しなど必要なことは、私がします。会員に限らず、お知り合いや関係方面へも、よろしくお伝えください。

以上、お知らせとお願いまで。

二十一世紀・東アジアの亀裂

— 問われる統合への構想力 —

橋 爪 大三郎



一九七九年に中国の改革開放経済がスタートしてから、ちょうど一五年。この間、年率平均一〇%以上の驚異的な高成長を続けてきた中国が、最近めきめきその存在感を増している。中国一二億の民が本格的な近代化を達成するならば、世界の勢力地図は大きく塗り変わることになる。

一九世紀から二〇世紀にかけての東アジアの構図を要約するならば、それは、中国の停滞/日本の躍進、の対照でもって特徴づけられる。日本は一九世紀の半ばに、いち早く明治維新をなすとげ、徳川幕藩制の遺産を近代国家の建設に転換することができた。それにひきかえ中国は、西欧文明への機敏な対応を欠き、植民地化への道を歩むことになった。中国がその巨大な国家意思をめざめさせ、潜在力を

發揮し始めたのは、比較的最近のことである。

二〇世紀半ばの日米対決も、この構図のなかのひとつのエピソードである。一歩先んじて近代化に成功した日本が、周辺に敵対する強国のないのいいことに、軍事的膨張主義をとり、中国を併呑するかまえをみせた。これはアメリカにとつて、クウェートを併呑する構えをみせたイラクを許せなかったように、許せないことだった。東アジアが日本の主導権下でひとつにまとまれば、安全保障上、無視できない勢力が登場する。そこでアメリカは、多国籍軍を編制し、日本を経済封鎖によって孤立させようとしたのである。日本はこれに、冒險主義的行動でもって応えた。

その結果、日本の軍事的野心は破滅への道をたどらざるを

えなくなつた。

二〇世紀の後半は、東アジアのこの亀裂の、戦後処理に費やされたと言つてもよい。そして、日本が経済成長を上げたあと国際的な責任の分担を求められ、中国が社会主義の道を模索したあと国際社会への復帰をはかりつつあるいま、東アジアは新しい世紀への入口に立っている。

*

東アジアと西ヨーロッパを比べてみよう。そこにはいじむしい違いがある。

西ヨーロッパを特徴づけるのは、多くの国家・民族と、共通の文化的基盤。共通の文化的基盤とはもちろん、キリスト教だ。それに対して、東アジアを特徴づけるのは、中国を核とする中心/周縁図式と、共通の文化的基盤の欠落とである。

中国は、単一民族国家でない。このことは言い古されているが、その実態は、日本人になかなかピンとこない。例をあげよう。同じ中国語でも、北京語と広東語はまったく通じない。上海語も通じない。漢字(表記法)は同じなのだ。発音や声調が違うため、聞き取れないのである。北京語と上海語の差は、イタリア語とスペイン語の差より大きく、たぶん英語とドイツ語の差ぐらいはあるだろう。

すると逆に不思議になるのは、これらの人々が、どうして同じ民族(中国人)としての自覚を持っているのだろうか、ということである。それは、長い時間をかけて形成された、と答えておこう。これには、地政学的な来歴を考えられるはずだ。

西ヨーロッパは、地中海とアルプス山脈に隔てられた一帯である。この交通環境(適度な移動と遮断)は、多くの民族を、異質性を保ったまま分散させた。地中海を挟んではイスラム世界、東方にはビザンチン/スラブといった、外界をつねに意識せざるをえなかった彼らは、その共通文化としてキリスト教を選択したのである。キリスト教は普遍文化と個別民族文化との結合は、近代国民国家の時代を経て、再び統合(ヨーロッパ共同体)を志向しつつある。

東アジアは、中国の大平野を中心に、北方の高原、チベット高原、朝鮮半島、日本列島、インドシナ半島を放射状に従えた地域である。中国の大平野は、政治的統合が容易であるため、多民族が異質のまま散在するという状態を維持することができなかった。春秋・戦国の多民族割拠状態は、ヨーロッパに比べかなり早い時期に、文化的融合状態(漢民族の自覚)へと移行していく。人為的な政治(融合を率先する)と慣習的な言語(融合に抵抗する)のギャップ

プを架橋する役割を担ったのが、漢字であった。漢字が、音声と対応を持たない表意文字であるのは、必然なのである。

中国の政治的統合は、周辺に及ばない。蒙古、朝鮮、日本、ベトナムなどへは、文化的な影響が間接的に及ぶことになった。中国からみればそれは、文化的な統合が不十分な異族である。周辺から中国をみれば、そこには親和（プラス）と反撥（マイナス）の二重の力学が働く。要するに東アジアには、政治と分離した普遍文化が、共通項として分けもたれたことはなかったし、いまも分けもたれてはいないのである。

東アジアにとっていちばん自然であるのは、中国が主導し、周辺国がそれに従うかたちの統合であろう。東アジア全体が、平等な資格で結びつくことは、望ましいかもしれないとしても、いくつもの亀裂によって阻まれている。その一部（たとえば、南北朝鮮の対立とか、大陸と台湾の問題とか）は、ごく最近の、冷戦の副産物である。香港問題など、植民地時代の副産物もある。日本が台湾を領有し、朝鮮を統治し、中国を侵略したという事実は、一九二〇世紀にかけての西欧文明との接触がもたらした不均等発展によるものと考えられる。

*

日本が経済大国としての位置を占め、中国が第三世界的な位置に甘んじているという現状は、東アジアの伝統とそぐわしくない。二〇世紀末の、中国の急速な経済発展は、中国がその本来の地位を回復していくためのプロセスと考えられよう。中国が日本を上回り、アメリカをも凌駕する地位を回復したとき、どのような世界秩序を構想すればいいのか、誰もプランを示していない。この問題について、日本人はあまりにも準備がないように思われる。

東アジアの安定と発展のため、日中の良好な関係がその基軸となることは、言うまでもない。ただしそのプロセスは、卵の黄身が自身を吸収していくように、日本の相対的な優位が徐々に失われ、中国のヘゲモニーがあらゆる分野で確立していくという、日本にとって厳しい経験となることを覚悟しておく必要がある。このプロセスを、イギリスがアメリカに追い越され、なおかつ良好な関係を保ったような、賢明なものにするにはどうしたらよいか。

イギリスとアメリカは、キリスト教や民主主義、英語といった、共通の価値観と行動様式をそなえている。日本と中国のあいだに、そのような共通基盤はない。東アジアの矛盾は、その近代化が外からのもの（西欧文明の受容）と

して経験されたため、この地域を統合するのに、異質な価値観を参照しなければならぬことだ。それが、近代科学技術であり、資本主義経済である。中国が、人権問題や民主主義について抵抗を示しているのは、中国の固有文明がそれと異質であり、中国それ自身の統合がそれを受容することによって揺らぎかねないからだ。中国は、人為的な政治的統合体である。自分たちを自然的共同体と信じている日本とは、異なるのだ。

日本にとって賢明なのは、次の二点を基本とすることだろう。

まず第一に、中国も承認せざるをえない価値、特に科学技術（先端技術）に関して、最後まで相対的優位を失わないように努力を集中すること。そのことによって、日本はある面で中国にとって尊敬に値する国であり続けることができる。

第二に、中国が徐々に西欧的な価値観と調和していきけるよう、アメリカと手を携えて中国にアプローチすること。アメリカのプレゼンスが東アジアから不在となってしまうば、この地域の勢力バランスが失われ、統合が脅かされる。それは、日本の国益にとっても大きな損害となる。超大国からただの大国へ、縮小の道をたどりつつあるアメリカ

力を、少しでも長くその地位にとどめておくために、日本はしかるべきコストの分担を惜しむべきでない。また、中国への投資などに、なるべくアメリカを巻き込んで、日中の利害が正面から衝突しないよう配慮するべきなのである。

*

いま、戦後政治からの脱却が叫ばれ、非自民政権が誕生した。また、日本の国連安保理常任理事国入りが話題となっている。国連のリストラムも、やがて始まるだろう。

これは、ほんの始まりである。冷戦以後の新世界秩序を、どの大国がどういう理念にもとづいて分担するのか。日本は、この秩序形成に参加するべきだし、その理念を提案すべきなのだ。その際、東アジアに位置する日本の、過去を踏まえ、現状を分析し、将来を見通す構想力が問われずにはすまないのである。

（はしづめ だいさぶろう・東工大助教授・社会学）

〔執筆者紹介〕編集部記

48（昭23）年神奈川県生まれ。77年、東京大学大学院社会学研究科博士課程終了。89年、公募で東工大助教授に。代表作として「仏教の言説戦略」「はじめての構造主義」「冒険としての社会科学」等。「橋爪大三郎コレクション」（論文集）を勁草書房から刊行中。鎌倉育ちのダンディズムと、クリスチャンの母譲りの潔癖性を内に秘めた水蓮の青年学究。

第一部 社会・経済・経営・国際

岐路に立つ戦後政治と改革の行方
うそつきは政界再編の始まり

橋爪大三郎
(東京工業大学助教授、社会学)
(四〇〇字×六枚)

「うそつき解散」を機に政局の焦点は、政治改革(選挙制度改革)から政界再編に移った。政治改革→二大政党制のはずが、順序が逆になったわけである。総選挙後、どういふ政権が現われるのか、この原稿を書いている時点では不確定でわからない。だが、軒余曲折はありながらも、日本が確実に戦後政治の殻を脱皮していくであろうことは確かだ。

戦後政治の殻を与えていたのは、言うまでもなく冷戦である。一九五五年、保守合同によって自民党が成立したのは、日本を自由主義陣営につなぎとめておくという、アメリカの世界戦略と連動していた。アメリカは、日米安保条約を結んで日本の安全を保障し、安い原油を提供するなど自由貿易の利益を享受させて、日本を資本主義経済繁栄のショーウィンドーとした。ソ連がアメリカと覇権を争ったことで、漁夫の利をえたのが日本である。

ソ連が解体し、社会主義圏が消滅したので、国際関係の枠組みも、アメリカの世界戦略も、根本的に変化した。保守二党論や政界再編が現実味を帯びてきたのも、自民党が分裂したのも、そもそも、社会党が政権をとったらどうしようなどと余計な心配をする必要がなくなったことによる。この底流を見通すことができず、自公民の連立でしのげると考えたのが、自民党守旧派の誤りである。

宮沢首相は恐かな総理として長く記憶されるだろう。よく考えてみると、宮沢政権のもとで政治改革が実現できる条件は小さかったと言える。宮沢現政権を支える力学の起点は、竹下派(経世会)の分裂にある。リクルートで準禁治産状態になった竹下元首相に代わって、金丸元副総

(5)

かぎり、多数決によるコンセンサスの形成など期待できない。

選挙も、国会での論議も、コンセンサスを形成するための手続きであるはずだ。コンセンサスとは、複数の意見が討論をたたくたかたの結果、収束した先を各人が独立に判断し、その結果を集計して全体の判断とすることである。全体の判断を全員が尊重するという前提があったら、この判断はコンセンサスに転化する。ところが国会では、合意形成のプロセス(料亭での根回し)とうわべの討論(儀式と化した質疑など)が最初から分離し、討論が成り立たないという状態になっている。そもそも合意するはずのない与野党が合意するのだから、舞台裏でなければならぬ。この結果、国民は、現実的なバランスに立って自分なりの判断をする機会を奪われてきた。つまり、秘密に言えば、国民のコンセンサスによる政治など、わが国では成立したためしがないのである。

自民党型の政治を脱却して、民主主義を成熟させるためには、国民がコンセンサスを形成できなければならぬ。それには、①討論のなかでよく似た主張の重大な違いをみつける、②自分の拠って立つ価値観を明確に意識する、③小選挙区で「究極の選択」型の投票をする、などの訓練を積む必要がある。国会は、社会の縮図にはかならない。国民ひとりひとりが意思決定の能力を高める以外に、政治改革の決め手はないのだ。(顔写真五八ページ)

「はしづめ、だいさぶろう」一九四八年生まれ。東大文学部社会学科卒。同大学院博士課程修了。現在、東京工業大学助教授、社会学修士。専攻は理論社会学、宗教学、社会学、記号論、ポピュラー音楽研究。主な著書「冒険としての社会学」(毎日新聞社)、「現代思想はいま何を考えればよいのか」(勁草書房)、「身体のかみへ」(共著、JICC出版局)、「僕の憲法草案」(共著、径野房)、「社会がわかる本」(講談社)ほか。

(7)

『建築文化』1993年7月号 書評欄より

様々な価値観が共存するこの世の中においてひどく偏狭な結論を導くことになろう。もっとも、わかりやすく説明することはそれ自体重要なことではある。ただ、わかりやすさの陰で犠牲になっている側面があることを忘れてはならない。

だから、この本を読んで社会がわかったような気になるのであれば、むしろ読まないほうがよい。これを一里塚にして、自分なりの問題意識を構築しなければならないのだ。その意味で、読者の姿勢がこれほど問われる本も珍しいのではないだろうか。(KN)

取り上げられている内容は、ドイツ統一の話から、炭酸ガスによる地球温暖化の話、はてはセクハラまで多岐にわたっている。本の性質からいって深く掘り下げた解説は期待できないが、平易な文章でわかりやすく書かれている。

しかし、この本に関していえば、このわかりやすいという点が最大のセールスポイントであると同時に最も危険な点である、と言わざるをえない。社会事象はさまざまなファクターによって成り立っており、安易な単純化は受け入れないはずである。そうした単純化は視点の固定化をもたらし、多種多

社会が分かる本
橋爪大三郎=著

講談社|1993.3|A5判|1,300円

ここ数年の世界情勢の動きの速さは、全くもって驚くべきものがある。一方国内に目を転じてみると、その旧態依然たる様は情けなくなるほどである。この本は、「ル・クール」という女性誌に'89年から'93年まで連載された内容のうち半分ほどを集めたもので、それぞれの項に初出の年月と単行本になった時点でのコメントが載せられている。それを読んで冒頭のような感想をもったわけである。

理がキングメーカーとして君臨してきた。その金丸氏が佐川急便スキヤンダで失脚し、跡目をめぐって経世会は小淵派と羽田派に分裂。小沢一郎氏を警戒して羽田派包囲網を敷いたのが、中曽根氏、竹下氏らである。宮沢政権は、竹下氏の側近梶山幹事長、中曽根氏の腹心佐藤孝行総務会長を両脇に配して、羽田派包囲網のうえに乗っていた。だから羽田派が、政治改革の主導権を握りかけるほど、守旧派は態度を硬化させるという構造があった。この間で優柔不断に右往左往したのが、宮沢首相だったのである。彼は、政治とはすなわち決断である、ということが最後までわからなかった。

しかし、宮沢首相のことを笑える日本人が、どれだけいるだろうか。なぜなら、日本では誰かが決断してもそのことを決めることはよくないと伝統的に考えられてきた。それよりも、みんなて相談していつの間にか決まるのがベストだとされてきたのである。

自民党の総務会は今も全員の一致が原則であるため、大事なことを何も決められない。改革は一步も進まない。離党した若手は、自民党をこっぴど批判する。全員一致制は、村落共同体の意思決定原理であって、近代政治の原理とはほど遠い。近代政治の原理、民主主義の大原則は、多数決である。多数決は、大勢の人びとがそのことを決断し、コンセンサスを形成する方法である。しかし日本人の感覚からすると、コンセンサス(合意)の形成とは、相談の結果全員一致になることである。多数決によるコンセンサスの形成を、日本国民は理解できるだろうか。ここに政治改革の成否がかかっている、と私は思う。

55年体制の国会は、与野党「対決」の場であった。自民党は、自由主義の政策について一致できる人びとの最大範囲だから、その埒外の政党は、対話が成り立たない人びとということになる。対話が成り立たないければ、対決し、多数決で決着するしかない。日本人にとって多数決とは、よくないやり方、少数者を黙らせるための最後の手段、強行採決のイメージである。いちばん外側に、話にもなんにもならない共産党がいる。そのつぎに、社会党がいる。さらに公明党、民社党がいる、という具合に、国会にはいくつもの同心円がある。自民党の内部も、同様のロジックで派閥の同心円に蔽われている。仲間とは同じことを考えているのだから、議論の必要がない。そうでない人びとは違うことを考えているのだから、議論しても無駄である。——これが日本人の無意識の前提である

(6)

1993-21-9/15

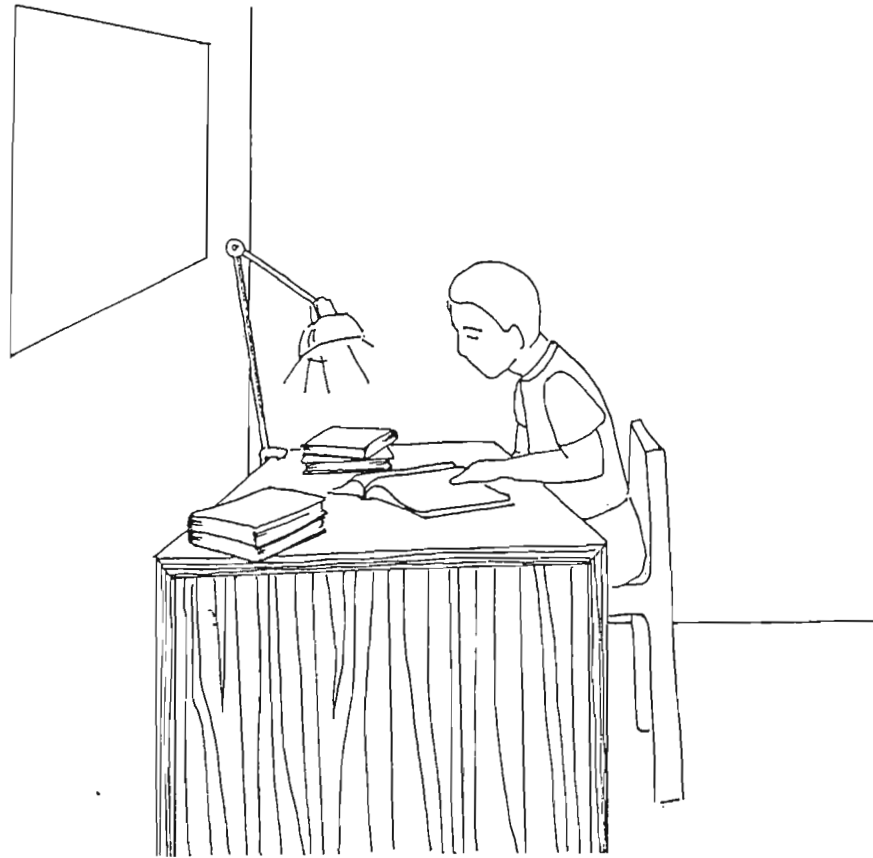
第5課

こんな教科書ほしかった

時間 90分 難易 ★★★

『日本語を学ぶ人たちのための日本語を楽しく読む本・中上級』 pp. 57-66

発行：産能短期大学国際交流センター 発売：凡人社 著者：小出慶一 1993. 9. 1



この課では、書評しよへうを読みます。書評で取り上げられる本は、新刊書の中でも、何か特色のある本が多いようですが、書評でほめられるかどうかで、本の売れ行きが変わる場合もあるそうです。書評は、ふつうの新聞や雑誌にも載りますが、ここで読むものは、「週刊読書人」という書評専門紙に載ったものです。どんな本について、どんな評価がされているでしょうか。この書評を読んで、本を買って読んでみようと思うでしょうか。

著者紹介 はしづのだいさぶろう 橋爪大三郎 (1948～) 神奈川県生まれ。東京大学大学院修了。東京工業大学助教授。新しい社会理論を探りながら、現代社会の動きをわかりやすく解きあかすべく、活発な著述活動をしている気鋭の社会学者。主な著書に「言語ゲームと社会理論」「仏教の言語戦略」など。

I。読む前に

1 下のa～oは、これから読む文章の中に出てくることばや表現です。この中で、ほめる表現には○、そうでないものには×を入れてください。またどちらでもないものには△を入れてください。

- a. [] ひからびた
- b. [] 快挙かいきよ
- c. [] 最適さいてきの
- d. [] 出色しよくしよくな
- e. [] 常識を破っている
- f. [] ばらつきがある
- g. [] 出来できばえ
- h. [] 改善の余地がある
- i. [] まだ工事中
- j. [] 意気込みいきこみがひしひしと伝わる
- k. [] 一気に読ませる
- l. [] 他の追随ついでを許さない
- m. [] バランスを欠いている
- n. [] 総花的そうはなごき
- o. [] 著者の顔が見えない

2 次の①～③のことばは、どのように使い分けられるでしょうか。a～fの場合、①～③のどれを使うのが適当でしょうか。①～③のうち適当なものを入れてください。

- ①作者
- ②筆者
- ③著者

- a. [] 小説
- b. [] 論文
- c. [] 新聞の社説
- d. [] 芝居、演劇
- e. [] 教科書
- f. [] 書評

* 3 書評を読むときには、どんな点に注目して読みますか。あるいは、書評にはどんな情報が入っていてほしいと思いますか。最小限必要だと思われるものを3つ選んで()に○をつけてください。また、a~fに適当なものがなかったら、必要だと思われる情報をgに書いてください。

- a. [] 買って読む価値があると言っているか
- b. [] 優れている点は何か
- c. [] 欠点は何か
- d. [] 値段は高いか安い
- e. [] 内容はだいたいどんなものか
- f. [] ページ数はどのくらいか
- g. [] _____

4 下のa~dは、「本」に関係のあることばです。下の図のどの部分のことでしょうか。()に記号を入れてください。

- a. コラム
- b. イラスト
- c. 図表
- d. 参考文献



☝ ここまで終わったら、クラスで答えの確認、意見の交換をしてください。

II. 読む

まず、次の質問を考えながら、全体を読んでください。この質問は本文のあとにもう一度出てきます。

なお、本文の右の○囲みの数字は段落番号です。

質問

- 1 この本(書評されている本)を、全体としてほめていますか。
- 2 この本は、どんな分野の本でしょうか。
- 3 この本の優れている点として、どのような点を挙げているでしょうか。
- 4 この本の欠点として、どのような点を挙げているでしょうか。

こんな教科書ほしかった

江原由美子・長谷川公一・山田昌弘・天木志保美・安川一・伊藤るり著
『ジェンダーの社会学』新曜社 2400円

ひからびた社会学にうんざりの、全国の学生諸君お待ちかねのテキストが、ついに登場した。快挙である。これを読めなかった私の学生時代がぐやしい。

《社会学入門でもあり、読物としても面白い本。普通のごくささいな日常生活から、社会とは世界とは何かを考えられたら、きっともっと社会学が面白くなるだろう。……二転三転した議論の末、私たちは大冒険に乗り出した。「ジェンダーだけをモチーフにして、社会学の入門書を書いてみよう。」——著者を代表して江原由美子さんは、こんなふう述べているが、その思いは半ば以上達せられていると言えよう。

ジェンダーとは《生物学的な性別……と区別された、社会-文化的性別》のこと。なおかつ、「ジェンダーの社会学」は、女性の視点にこだわるフェミニズムとは異なる立場に立つ。《本当は、男性も女性も同じくらいジェンダーに「囚われて」いる》のだから。本書は男女を問わず、自分の足元から社会と人生を考え直すために最適の案内書だ。

さて、江原さんはじめ六人の執筆者が分担するのは、日常生活/政治社会/家族/労働/世界社会/感性リアリティの各章。社会学を学び始めたばかりの若い学生諸君が、自分の生活の範囲内で無理なく理解できるテーマをゆったりとカバーしている。文章の調子も、著者からの個人的メッセージとして読者に届くようになっている。

この本で出色なのは、これまでの常識を破り、知識は知識にすぎないと、コラムに追いやってしまったことだ。そうしたコラムや、キーワード、研究ノートといった囲み記事だけ拾い読みしても、ちゃんと今の社会学の輪郭がつかめるようになっている。そのかわりに本文では、社会学の考えかたをわかりやすく紹介してある。それも、集中力の限度を越えないように、数ページずつに区切って。参考文献、図表の出し方もよく考えられている。そのうえに、柴門ふみさんの若々しい感覚のイラストがたくさんあって、ページを繰るのが楽しい。——という狙いが、よくわかって、それに共鳴した。しかし、実際の出来ばえを率直に言うと、各章ごとにばらつきがあり、全体の調整も必ずしもうまくいっていない。だいぶ改善の余地がありそうである。まだ工事中、ということだろう。

だが、それはそれとして、著者たちの挑戦の意気込みは、やはり読者にもひしひしと伝わるはずだ。特にはじめの数十ページは、映像的な手法が成功して、作品としても優れており一気に読ませる。本書がきっかけとなって、社会学を見直す人びとの輪が広がり、やがて中級の読み物、一線の研究書へと、手が伸びていってくればいいなあ、楽しい夢をみたくなる。

というわけで、教科書として今のところ、本書は他の追隨を許さないが、これ一冊ですむかという問題もある。テーマや切り口の点で、社会学の全体からみてバランスを欠いているのは確かだ。それが気になる人もいるだろうが、総花的に何でも取り上げ、著者の顔が見えないこれまでの教科書にくらべれば、断然こちらをとるのが正しい、と思う。ただ、本書を補う意味でも、別な方向へのかたよりのもった教科書が、真似でもいいからあと何冊か出てほしいのだが。

(橋爪大三郎「週刊読書人」読書人 1989年8月14日号より)

質問

1 この本（書評されている本）を、全体としてほめていますか。

- a. ほめている。
- b. ほめていない。
- c. どちらとも言えない。
- d. 評価については、何も言っていない。

☐ 上のように考えた根拠は、文章中のどの部分ですか。その部分を1つ書き抜いてください。

2 書評されている本は、どんな分野の本でしょうか。

- a. 社会学の専門書
- b. 社会学の入門書
- c. ジェンダーについての専門書
- d. ジェンダーについての入門書

3 この本の優れている点として、どのような点を挙げているでしょうか。1~2つ書いてください。

4 この本の欠点として、どのような点を挙げているでしょうか。1~2つ書いてください。

△ ここまで終わったら、クラスで答えの確認、意見の交換をしてください。

III. もう一度 1993-21-12/15

もう一度、本文を読んで、次の質問に答えてください。

- 1** 「その思い」(7行目)とは、どんな「思い」ですか。
- ジェンダーとフェミニズムについての入門書を書くこと
 - 普通の日常生活から、社会や世界を考えること
 - 社会学についての議論をおもしろく紹介すること
 - 世界を冒険して歩くこと
- 2** 「フェミニズムとは異なる立場に立つ」(10-11行目)のは、なぜですか。
- 生物的な性別は無意味だと考えるから
 - 男性の視点から本を書こうと考えたから
 - 著者たちはフェミニズムに批判的だから
 - 男女ともにジェンダーに囚われていると考えるから
- 3** 「～という狙い」(25-26行目)は、この文章のどこからどこまでの部分を受けていますか。
- 「ジェンダーとは」(9行目)から25行目まで
 - 「さて」(14行目)から25行目まで
 - 「この本で出色なのは」(19行目)から25行目まで
 - 「そのかわりに」(22行目)から25行目まで
- 4** 「狙い」(25-26行目)の中で、もっとも重要な点は、どれだと思えますか。
- 社会学の考え方の理解を重視している点
 - 若々しい感覚のイラストを多く使っている点
 - 著者たちの個人的メッセージとして読める点
 - 今の社会学の輪郭がわかるようになっている点
- 5** 「それはそれとして」(29行目)を言い換えると、次のどれが適当でしょうか。
- 欠点が多いので
 - 欠点はあるけれど
 - 欠点が少ないので
 - 欠点はあまりないけれど

- 6** 「楽しい夢」(33行目)とは、どんなことですか。

- この本の内容が改善されること
- 映像的な手法がもっと使われるようになること
- 社会学の専門書を読む人が増えること
- 著者の意気込みが読者にちゃんと伝わること

- 7** この文章全体から考えて、

(1) 筆者は、どんな分野を研究している人だと考えられますか。

(2) それはどこからわかりますか。

- 8** もう一度全体を見て、次のことが、第何段落に書かれているかを指摘してください。書かれていなければ、×を書いてください。

- [] この本の著者(たち)はどんな人か
- [] この本が書かれた目的
- [] この本に対する全体的な評価
- [] 本の内容
- [] この本の優れている点
- [] この本の問題点
- [] この本のテーマについての筆者(書評を書いた人)の意見
- [] この本を読んだ後、どんな本を読んだらいいか

👉 ここまで終わったら、クラスで答えの確認、意見の交換をしてください。

IV. 読んだあとに

1993-21-13/15

●第5課 こんな教科書ほしかった

1 次の文章は、本文の内容を要約したものです。下の□の中から、適当なものを選んで適当な形に変え、___に入れて、文章を完成してください。

『ジェンダーの社会学』という本は、社会学の教科書として、今のところ、他の追随を①_____と言っているほど、優れたものである。

著者たちは、この本を書くにあたって、「普通のごくささいな日常生活から、社会とは世界とは何かを考えられたら、きっと、もっと社会学が面白くなるだろう」と考えたようだが、その意図は半ば以上②_____いると言えるだろう。この本は、著者たちも言っているように、社会学の入門書として書かれたものだが、一貫して、ジェンダーという③_____から書かれている点が他の教科書と異なる点である。

また、この本の特に④_____点は、本文が、社会学のものの考え方をわかりやすく紹介することに使われていて、いわゆる知識的なことは、コラム、キーワード、研究ノートといった囲み記事に集められている点である。もちろん、囲みだけ読んでも、社会学の輪郭はわかるように工夫されているが、知識は知識に⑤_____、と本文から追いついてしまったことは見識である。また、本文も、集中力の限界を越えないように適当な長さで区切られているし、そのうえ若々しい⑥_____のイラストがたくさん使われていて、読み進むのが楽しくなるようになっている。さらに、文章も教科書的ではなく、著者たちの声が聞こえてくるような調子で書かれている。このような著者たちの意図はよくわかり、また共鳴もしたが、しかし、実際の⑦_____にはばらつきもあり、まだまだ、⑧_____の余地があるのも事実である。

だが、このような⑨_____はあるにしても、著者たちの⑩_____は、じゅうぶんに伝わってくるし、特にはじめの数ページはひじょうに優れたものである。この本が⑪_____になって、社会学を見直す人たちが増えていってくれればと思う。もちろん、この一冊で社会学のすべてがわかるというわけではない。テーマからみても、かなり⑫_____ものであることはまちがいない。それでも、この本は他の教科書に比べれば断然優れており、今後、この本を補うような、この本とはまた異なるかたよりをもった教科書があつてほしいと思う。

意図・意気込み・おぎなう・改善・かたよる・感覚・きっかけ・視点・すぎない・優れている・達する・できばえ・問題点・許す

* 2 この書評について

(1) 『ジェンダーの社会学』を読んでみたいと思いましたか。

a. 読んでみたいと思った b. 思わない

(2) もしそう思ったとしたら、それは、この書評のどんな点からですか。

(3) この書評は、書評としてすぐれたものだったでしょうか、あるいは何か問題があるでしょうか。あなたの意見を書いてください。

『明るい国立計画』一橋祭93パンフレット pp.44 一橋祭運営委員会

パンフレット企画 著名人アンケート

一橋祭ではパンフ企画として一橋大学または一橋祭に関係のある方にアンケートを実施しました。いずれも各界の一线でご活躍中の方々ですが、今回はそれぞれの専門分野とは関係なくプライベートに関する質問を並べてみました。それぞれの回答には非常に人柄がにじみ出ていると思いますので、是非お読みください。

1. あなたの座右の銘は？
2. あなたの尊敬する人物は？
3. あなたの宝物は？
4. あなたが最も嫌いなもの(こと)は？
5. もし、現在の職業についていなかったら？
6. もし、総理大臣になったら何をしますか？
7. おすすめの本を3冊紹介してください(作者と題名のみ)
8. 若い頃の失敗談を聞かせてください
9. 学生時代の思い出を聞かせてください

橋爪 大三郎氏 (東京工業大学)

1. 特になし
2. その時々尊敬する友人を持っている
3. 特になし
4. こういうアンケートに答えるのは「最も」ではないが「かなり」嫌いだ。
5. やっぱり本を書いていただろう。
6. 非現実的な仮定では、答えようがない。
7. すべての人に共通に進めたい本はない。
8. 特になし
9. よく考えてみると、学校にはあまりよい思い出はない。

1993-21-14/15

近未来社会予測——30人アンケート

21世紀まで、7年というタイムスパンになった。世紀末の近未来社会はまだはっきりとした形になっていないが、そのイメージにつながる諸変化は、すでに私たちの周りの現実の中に生まれているのではないか。そういう問題意識で本誌の執筆者など30人にアンケート調査し、93年の注目すべき事象や作品を挙げてもらうとともに、90年代後半から21世紀初頭にかけての近未来社会像を観測してもらった。
掲載は五十音順。質問項目は次の通り。

- ①93年に起こった社会現象（政治、経済、社会、生活）で、近未来（世紀末）社会を観測する上で、あなたが最も注目した（重要と考えた）のは何ですか？
- ②93年に登場した作品（商品）で、近未来社会を観測する上で、あなたが最も注目した（重要と考えた）のは何ですか？ 作者（企業）名もお書きください。
- ③あなたは近未来社会について、どんな時代イメージ（キーワード）を持っていますか？ また、そのイメージに最も近い人、作品（商品）、事象を理由も含めてお書きください。

『日経イメージ気象観測』季刊「レポート」27号94年1月号 日本経済新聞社

橋爪大三郎 東京工業大学助教授



APEC関係会議に
参加の各国の首脳たち
＝ロイター・共同

- ①クリントン米大統領の主催によるAPEC（アジア太平洋経済協力会議）の開催。アメリカが、対ロシア、対西欧から、思い切ったアジア重視に政策を変更する第一歩であると思える。
- ②崔健「一無所有」（東芝EMI TOCT-8244）。存在感を急速に高めつつある中国の、若い世代の才能を代表するロック・アーティスト、ツイ・ジエンのアルバム。
- ③アメリカを軸とする、一極＝多極構造。米中日の3国がかたちづくるアジアの三角形が、国際関係を支配する最大のファクターとして浮上するだろう。

1993年（平成5年）12月17日（金曜日）

アンケート特集 一九九三年の収穫

恒例の年末アンケート特集「一九九三年の収穫」をお送りします。広く諸分野の専門家、読書家の方々にこの一年間に日本で出版された書籍のなかから、ジャンルを問わず、一年を通じて今年の収穫と思われる本を三冊づつ上げていただき、それぞれに短いコメントを添えていただきました。掲載は五十音順としました。
(編集部)

橋爪大三郎

宮台真司・石原英樹・大塚明子『サブカルチャー神話解体』（パルコ出版）。少女メディア、音楽、マンガ、性風俗の四領域に焦点を絞り、異様ともみえる情熱で現象に肉薄する大がかりな分析作業の中間報告。『マクロス』連載時から注目を集めた。数十年もすれば不動の古典となっているかも。

吉澤夏子『フェミニズムの困難』（勁草書房）。団塊世代とその周辺を巻き込んだラディカル・フェミニズムの洗礼が一巡したあとの、普通の女性のフェミニズムの思索。「敵対する男/女」を前提しないとするまない政治主義からの脱却を果している。

佐藤俊樹『近代・組織・資本主義』（ミネルヴァ書房）。日本資本主義の特異なリアリティを、M・ウェバーの方法に戻って再構築する現代的な試み。近代との対決なしに「近代の心ごと」を気取ってもしかたないという指摘に共感する。（はしづめ・だいさぶろう氏＝東京工業大学助教授・社会学専攻）

橋爪大三郎

◎社会学

'93年は、『コレクション』三巻を動
草書房から出しました。'94年はこ
れに続いて、旧稿の『性愛論』をリラ
イトして出版する予定です。また王輝
氏の『中国の「官僚病」』を翻訳して
出版することになっています。宝島社
からのオムニバス・シリーズ「21世紀
を生き始めるために」の統巻も執筆し
ます。確定しているのはこの辺りまで
で、なるべく時間を余して新しい領域
のものに取り組んでいきます。

2大政治グループ形成を 模索

政治

政治改革法案、衆院で可決

橋爪大三郎 東京工業大学助教授

日本独自の中選挙区制は、比例代
表制に近い。多党化が進むのが本当
だから、自社両党がしのぎを削る
55年体制のほうが不自然だった。こ
の制度のもと、社会党は政権交代の
チャンスから遠ざかり、多党化の波
にのまれる。一方、自民党は、党内

の多党化＝派閥全盛を迎えた。

政党でありながら政党たりえぬこ
の現状を改革する動きが、政権政党
である自民党の内部から湧き起った
のは、だから当然と言えば当然だ
った。改革の柱は、小選挙区制であ
る。この制度のもとでは、派閥で選
挙を戦えない自民党も、単独で選挙
を戦えない社会党も、解体するほか
ない。細川政権は政治改革を公約に
掲げることで、自社両党を追い詰め
る一方、連立の求心力を強めている。
この政権は、次の選挙で連立の組み
換え（社会党の切り捨てと自民離党
グループの吸収）を図りつつ、新し

い2大政治グループの形成を模索し
ていくはずだ。

それでは、保革に変わるという
軸に沿って、2大政治グループが結
集するのか。予測はむずかしいが、
人脈でいえば、細川～武村～江田グ
ループと小沢～羽田～市川グループ
とが核になればいちばんすっきりす
る。その時期は、比例区がその役目
を終え廃止される、おそらく90年代
の末ごろなのではないか。もちろん
これには、中央省庁の統廃合や地方
分権も絡むだろう。いずれにしても、
さまざまな制度改革が目白押しの改
革の時代が当分続くはずだ。